

ランゲルハンス島行きの電車

深夜の駅のプラットホームに立っていた。大きな駅でプラットホームが何本もならんでいたが、どのホームも無人だった。

（寒々とした光景だな……）

「ランゲルハンス島行きの電車は何番ホームから出ますか」

突然声をかけられてふり向いた。私のすぐ右横に寄りそうように、その男が立っていた。変わった形のベレー帽……というよりも、まるで大黒様がかぶる頭巾に似た黒い大きな帽子を斜めにかぶり、立ての悪い窮屈そうなグレーのスーツを着た五十近い男だった。中身がはち切れそうになった茶のバッグを肩から下げ、同じ包装紙に包まれた箱がいっぱい詰まった紙袋を持った男の顔は、生っ白くて細長く、かすかに不精髭がはえている。

（人を小馬鹿にしたようなあの目つきだ）

「ランゲルハンス島行きは二十番ホームです」

「二十番ホームは……どこですか？」

「ここに反対側の、一番向こうの端ですよ」

男の顔を見た瞬間に騙してやろうという気がおきて、ホームを何本も越したはるか向こうを指さしながら嘘をついた。

（君は昭和五十年頃に僕を脅迫したことがあるだろう？）

一瞬とまどったあと、「どうも……」といいながら男は無人のプラットホームを遠ざかり、大儀そうに階段を登って視界から消えていった。

工事関係者がはく安全靴でもはいているのか、ひどく頑丈そうな靴のたてる金属製の音が、あたりに鳴り響いた。

（風もなく、ニオイもなく……）

頭上の電光掲示板に、その時『ランゲルハンス島行き』という文字が点灯した。私の立っているところがまさに彼の探しているプラットホームだった。

時間のせいなのか、乗りこんだ電車も乗客の気配がなく無人だった。音もなく発車して、すべるように走る電車の漆黒の窓の中を、街の灯火や踏切の警報機の赤いランプなどが次から次へと現れては消えていった。

（北……暗ければ……望郷ならず、か）

ふいに私のいる座席のすぐそばのドアがあき、重苦しい靴の音とともにあの男が入ってきた。私はびっくりして膝の上においたバッグをかかえてとろさに身構えた。男はていねいにドアをしめたあと、二つ間をおいた左横の座席に腰かけながら「結局、あんたもランゲルハンス島に行くんですね」といって、口許に皮肉な笑いを浮かべた。

「ボ、僕は家に帰るつもりで……」

「何、いいじゃありませんか、いっしょに行きましょう。私はこれから島に行つて商売をしなければならいんです。なにせあそこはうちの製品がほとんど普及してないんで、代理店をみつけ、一軒でも二軒でもいいから、なんとか契約を結びたいんですよ。ところで、あんたは我が社の製品をご存じですか」

製品の名前もいわずにいきなり尋ねてきたので「知らない」と答えた。男は私との間の座席に大きなバッグをおくと、ファスナーを開け

てせわしなく中をかき回し始めた。

（改心してまともな仕事についたとでもいふのか？）

「この手のものは時代を追って説明した方がいいと思うのでね」とつぶやきながら、男は分厚いファイルホルダーを引っ張りだした。長年使っていたために背表紙が擦り切れて、今にもバラバラに分解しそうなファイルホルダーの中にめざすものをみつけた男は、一枚の紙を引っ張り出して私の前に突き出した。

茶色に変色した紙に、古めかしい銭湯のカランのような物とモノクルをかけたカイゼル髭の男のエッチングが描かれ、下に宣伝文句とおぼしき文字が並んでいる。

〈見ヨ！ 数百万ノ惱メル人ニ希望ヲ與エタル……………弊社製造ノ健康優良蛇口『ヴァッセルハーン』ハ獨逸國ミビヤエル・グーテキン博士ノ發明セシモノ也。本品ハ帝國醫科大學及海陸軍其他各病院ノ御用ヲ命ゼラレ、殊ニ内外需用諸君ノ高評ヲ博シタルハ偶然ニアラズ、是レ全ク無比ノ良品也。赤銅製一個價金貳圓五十錢ヨリ十八金製價金貳拾五圓マデニテ、他ニ比類ナキ大廉價確實ヲ旨トシ、懇篤ニ販賣致候間御購求ノ程希ヒ候。屈託ナキ健ヤカナル人生ヲ重ンジル貴紳淑女ハ先ヅ本品ヲ試ミ給ヘ。説明書ハ御申込次第——東京日本橋區本町・合名會社・大王商會ヨリ進呈ス……………〉

右上にあるカイゼル髭の男の絵の脇には〈官許獨逸國無雙發明王グーテキン博士〉と説明があり、広告の上下左右に〈他ノ山師的廣告ト御同視ナク〉とか〈弊社ノ特色ハ言行一致〉、あるいは

「御安心ノ上御用命賜ワラン事ヲ乞フ」などという文字が配置されている。

（今度はどんな騙しの手口をあみだしたというんだ？）

「明治三十八年の我が社第一号の宣伝広告ですが、いかにも明治らしく古色蒼然としているでしょう。それに比べこちらはぐつと時代が下がって昭和初期のものですがね」

男は別の広告を取り出して見せた。《體裁優美、形狀頗る小形、機械精巧、機能鋭敏》などのただし書きのついたどこにでもあるような蛇口の絵と、竹久夢二の美人画を思わせる和服姿の美女の絵とともに、宣伝文句がゆったりしたスペースに並んでいる。

《『ヴァッセルハーン』は◎安全で簡単で、そして軽快なる、苦惱せる時のお手當……そんな便利な方法は皆様方が少しの猶豫もなくお用ひになりませう。◎かくて『ヴァッセルハーン』の賣行はドシドシ増加して行きます。◎御注文は送料十二錢添へ前金にてお願いいたします。◎悩める人に『ヴァッセルハーン』……發賣元・東京日本橋大王商會》

男は席をつめて私のすぐ脇ににじり寄ってきた。

「ヴァッセルハーンだか何だか知らないが僕に蛇口は必要ないよ」

「でも、あなたの人生を左右しているのは屈託そのものといっていいでしょう？」

男はしたり顔をしていった。

「屈託？」

「いつも何か気にしてくよくよと悩むじゃありませんか」

「そんな……第一、それとこれとどんな関係があるんだ？」

「だから、そ我が社の……」

私は席をたつて逃げた。

その背後から「この昭和十九年の戦時下の広告を見て下さいよ！……ホラ、大東亜戦争中は敵性語の使用禁止のあおりを受けて、ドイツ語だって誤解を招きかねないってんで『ヴァッセルハー』を改め『チャグチー』って名前に変えたんですよ。『チャグチー』ですよ！ それにこの文句『空に神風！ 亞歐翔破の壯舉、皇國の威力、國産の効力！ 勝って勝って勝ち抜く為に、神國日本に大王商會のチャグチーあり！』ってんですからね、今の日本じゃ想像出来ないコピーじゃないですか！」

連結のドアを開けて前の車両に逃げる私のあとを追って、大きなバッグを肩にかけ、右手にファイルホルダーと広告の紙切れを驚づかみにし、左手に紙袋を持った男はドタドタと追いかけてくる。私はそこがどん詰まりの先頭車両であることに気づいた。もう先がない。私は運転席を背に立ち止まって身構えた。

荒い呼吸の男が近づいてきてバッグを床に下ろすと、ファイルホルダーから真新しいパンフレットを抜き出して私に見せた。多色刷り二つ折パンフレットでまず目に飛びこんできたのは『ヘルシーコックSX300』という大きな金色の斜体文字と、その脇にある艶消しの銀色に輝く洗練されたデザインのスネ口の写真だった。

「これがもうとも新しい我が社の製品ですよ！」

「ヘルシーコックだって！ 健康蛇口をただ英語に直しただけじゃないか。ヘッ！」

「だって今さらヴァッセルハーでもチャグチーでもないでしょう。だ

いいちね、物が全然違うんですよ。確かに初期のドイツのグーテキント社から輸入していた頃から、戦後独自に開発したヘルシーコック十二、三号までは、材料も金や真鍮やステンレスなんかだったから故障を起こしやすくてね、しよつ中交換しなければならなかった：でも平成元年に我が社の開発研究所の城田博士がファインセラミックスとチタンを材料に作った画期的な製品「A1号」が登場してから、性能が飛躍的に向上したんですよ。ホラ、ここをよく読んで下さいよ」

勢いよくドアの隅に追い詰められ、ついには尻餅をついた私の目の前に、男はパンフレットを押しつけた。

「複雑な人間関係に疲れ、衰えた脳をリフレッシュ！ マルチメディア時代に対応する素晴らしい効果を試しませんか！ 『ヘルシーコックSX300』の画期的特徴は生体拒絶反応を克服し、取りつけ期間を半永久的に延ばしたことです。『ヘルシーコックSX300』は二一世紀のオトナの必須アイテムです！ 』」

「これがなんで生体拒絶反応に関係があるんだ！ たかが蛇口じゃないか！」

「たかが蛇口だって？……あんたは信用してないんだろう？ エッ！ 俺が気に入らないんで、俺のいうことをはなから信用したくないんだろう？」

突然態度を豹変させ、血走った目でにらみつけながら男は叫んだ。その時、電車がブレーキをかけて停止すると、私の背後のドアが開いた。転がるようにしてホームに出た私に追いすがって馬乗り

になった男は、いきなり大きな頭巾をむしり取って右の側頭部をグイと前に出して見せた。そこにパンフレットの写真と同じ形の蛇口が突き出している。男が右手で蛇口のコックをひねると粘りけのある金色の液体が、雫となってポタポタと落ちてきた。

「ねたみ、ひがみ、怒り、恐怖、怨念、自己嫌悪……そんなあらゆる悩みのもとが、ホレ、こんな風にマイクロ・バイオ・フィルターを通して自動的に排出されるのを見ても、あんたはまだ信じないというのか！」

口許にあの皮肉な笑いを浮かべたまま、男は雫が身体にかからないように上体を傾けたまま紙袋の中の包みを一つ取り出し、包装紙を破いて中身を私の方に差し出した。そこに男の側頭部にあるのと寸分違わぬ真新しい蛇口があった。

「あんたには絶対これが必要だつて！ そうだ、あんたがランゲルハンス島の代理店契約第一号になればいいんだ！ 今からでも遅くないから私に取りつけてあげる。ナニ、心配することはないって。こう見えても私は装着技師第一種免許の持ち主なんだから。その前にまず髪を刈らなきゃ……」

晴々とした顔でいいながら、男は私の髪の毛をむんずとつかんで顔をのけぞらせ、いつの間にか取り出した電動バリカンのスイッチをいれた。ブウウーンと刃物が作動する音が耳もとに迫ってきた。